

的生産様式」など夥しい数の著作を残して、三十一歳の若さで一九三七（昭和十二）年奥秩父にて遭難死している。この時代にアジア的生産様式に着目した小出（早川）の歴史家としての先駆性は、再評価されるべきであろう。ちなみに長女小出真理は、詩人となり、ロシアの詩人マンデリシユタムの翻訳がある。

こうして露語部は、ほぼ同時期にマルクス主義の文芸理論家蔵原惟人と歴史家早川二郎、また作家、翻訳家として今なお高い評価を受けている神西清を輩出していたわけである。このような人材と、ともすると、過激な言動に走り易い学生を擁する露語部は、他の語部以上に特高のマークが厳しかったことは十分想像できる。

八 露語部の教育における「露西亜会」の役割

教育の一環としての露西亜会

「東京外語露西亜会」は鈴木於菟平教授在任中、一九二一（大正十）年前後にはすでに存在しており、会報も二回出たことがわかっているが、その会報も、また会の組織についての資料も残っていない。ただ、その組織は「種々の事情の為校の内外を打て一団とする意味に於て欠如たるものがあつた」という（『会報』第三号「本会新会則制定の経過」参照）。

鈴木教授が一九二三（大正十二）年夏ハルビンで客死した後、在校生も会員に加えて会の活動をより積極化しようという要望が高まり、一九二五（大正十四）年五月の集会で新しい会則が制定され、次いで翌二六年五月三十日の総会で八杉貞利教授が会長に推され、幹事七名（教官一、卒業生三、在校生三）が会長から指名された。

その年の七月に出た最初の会報は、鈴木教授時代に会報が二回出たことを考慮して「第三号」とされた。八杉会長

は「希望」と題する巻頭言において、北にハルピンの日露協会学校、西に大阪外国語学校が新設された現在、これらの競争者と相闘つて勝利者となり、本邦対露関係の指導者たるべき使命を全うし得るため、在校生は最も緊張せる気分をもつて学業の習得に努力し、校外の先輩は良く後進を誘掖指導し、校の内外が結束を固くし、一団となつて活動するよう切望している。

(注 日露協会学校は一九二〇(大正九)年、大阪外国語学校は一九二二年創設。前者は一九三三年哈爾濱学院と改称)

新しい会則は、会員を「露語部現旧教員、本科卒業者、選科修了者、並に在學生」とし、専修科の修了者並に在學者、本科・選科・専修科の中途退學者も会長の承認を経て入会し得るものとしている。

会の目的は「会員相互の助力、親睦を図り、露西亜に関する各種事項を研究する」とことと定められ、この目的達成のため諸種の会合の開催と会報の発行が規定された。

これに従つて總會と例会が毎年それぞれ一回(五月と十二月)開かれ、各種の分野で活躍する卒業生、時には部外の専門家、あるいは駐日ソ連大使館員、訪日中のソ連の作家、語學者によるソ連事情についての講演が行われ、会員は当時の刊行物や放送からは得ることのできない清新な知識を得ることができた。また在校生だけが先輩を招いて話を聞く「小会」も随時ひらかれた。

会報は毎年二回発行された。会報には總會及び例会における講演が原稿のまま、あるいは要旨の形で収載された。また会員から寄せられたソ連事情やロシア史、ロシア語に関する研究、ソ連視察旅行記、内外各地の支部使りも随時掲載された。「会報」第六号の「学校近況」には、一九二七(昭和二)年から四年制に移行した後の露語部の文・法・貿易・拓殖各科別の授業課目と時間配当が詳しく紹介されている。

生徒委員による語劇大会の報告やクラス使りも楽しい。語劇については、上演された劇の梗概と配役が紹介され、

トドロヴィチの懇切な指導に対する感謝の言葉が添えられている。特に卒業生の回想記には、外語創立当初からの教師の風貌、その授業ぶりや授業内容が生き生きと語られていて、これまた露語部の歴史の貴重な資料となっている。

一九二五（大正十四）年一月二十日、日ソ基本条約が北京で調印され、二月二十七日に公布されて日ソ国交が回復した。露西亜会では五月二十三日、学生が主体となつて着任早々のコップ・ソ連大使を招いて歓迎会をひらいた。歓迎会には大使のほか、浦潮極東学院の日本語教授で外語露語部とも由縁深いスパルヴィン博士ら大使館側三名、それにロイター通信社のスレパック特派員が出席した。八杉教授の歓迎の辞、大使の挨拶の後歓談に移り、スパルヴィン、松田衛教授らの挨拶があり、最後に在校生数名がロシア語のスピーチや文学作品の朗唱を行った。歓迎会は大成功であった。それ以後、ソ連側の客を招いて交歓することは露西亜会の恒例行事となつた（『会報』第三号による）。

翌一九二六（大正十五）年十一月二十七日は八杉会長の表現によれば、「我露西亜会のため記念すべき日の一」であつた。この日、ソ連邦代理大使ベセドフスキーはじめ、大使館、商務館員及びその家族四〇余名が露西亜会の集まりに参加したのである。八杉会長は「外国使臣の主なる人々が、しかもかくの如く多数相携へて、渺たる一学校の、主として学生の集會に参列したということは恐らく母校創立以来初めての事で、他語部にも前例の無いことである」とその喜びを表現し、当日の学生のスピーチ及び語劇のプログラム作成及びその実現に努力したトドロヴィチはじめ露語部諸教官に感謝している。上演された劇はメレシコフスキーの史劇『皇太子アレクセイ』で、二週間ほど前の語劇大会で演じたものの再演であつた（以上『会報』第四号による）。

翌一九二七（昭和二）年十一月二十六日にひらかれた第二回の催しにはマイスキー代理大使以下、館員及びその家族や留学生等約四〇名が参加した。学生のスピーチ、短編小説や詩の暗誦は学年別に行われ、一年生三名、二年生七名、三年生四名が出演した。劇はゴリーキーの『町人』であつた（『会報』第五号による）。

第三回目の大会は一九二八（昭和三）年十二月八日で、ソ連側からはトロヤノフスキー大使以下三〇余名の客を迎えた。上演された劇はトルストイの「一切の禍根」。その後の学生のスピーチと朗誦には一年生から三年生まで一一名が出演した（『会報』第七号による）。

第四回大会は一九二九（昭和四）年十二月七日、ソ連側の客は相変らず三〇余名で盛会であった。学年延長のため翌年卒業すべきクラスがなかったため語劇はなく、スピーチと朗誦に生徒一八名が出演した。

迫りくる思想統制

しかし翌一九三〇（昭和五）年にはこの大会は「諸種の事情によって」開かれなかった。

当時大学や専門学校に対する文部省の思想的規制は次第に強まり、一九二八（昭和三）年一月には専門学校令が改正され、「人格の陶冶及び国体観念の養成」が目的に加えられ、同年十月には思想問題に対処するため大学及び高等専門学校に学生（生徒）主事が置かれた。ソ連の客を迎えての露西亜会の行事の中絶もこのような事情と無関係ではなかったと考えられる。

『会報』第一〇号（一九三〇年七月発行）巻頭に載った八杉教授の新生入生に与える告示とも言うべき「露語部の使命に就て」は、当時の厳しい情勢下におけるロシア語学習の態度について生徒の注意を促したものである。八杉教授は、ロシア語の学習研究にはソ連国情の研究は必要不可欠であるが、ソ連が共産主義を建国の基盤としているからと言って、その理論の研究に没頭するようなことがあれば、それは露語部本来の使命とは関係ないものであるのみならず、周囲の同僚に多大の迷惑を及ぼすような結果を招く恐れがあること、ロシア語と言えば共産主義を連想する人の多いわが国の現状では、露語部にあつてロシア語とソ連事情の研究に従事する者は一言一行にも慎重でなければなら

ぬこと、その半面、外語の目的がたとえ「外国語に熟達し、実務に適する者の養成」であつても、外国語及び外国事情の研究には学習者の能動的努力が必要であり、学習の態度は飽くまでも学究的であるべきこと、皮相な知識の獲得に満足する軽薄な学習態度では競争激甚な社会で勝利は得られないことを切々と説いている（『会報』第一〇号参照）。

満州国の建国（一九三二（昭和七）年）など内外諸情勢の変化は、在校生の指導誘掖という露西亜会の活動の更なる積極化を要求した。一九三九（昭和十四）年三月、満州国の主要都市を歴訪した八杉会長はすでに外語を停年退官していたが、南満州鉄道株式会社が社員のほとんど全部に対し、種々の方策を講じてロシア語の習得を奨励しつつある実情を見、また日露協会の後身たるハルビン学院が満州国の国立大学に昇格して年限を延長し、毎年官費生四〇名を含む百名という多数の学生を採用し、関東軍の指導のもとに豊富な経費をもって万般の設備を整えつつあること知り、大きな衝撃を受けた。

露西亜会による課外講座

八杉会長は、「東京外語露語部卒業生の語学力についてはさしたる悪評を耳にしないが、隣邦事情に対する知識の欠如はかねてから指摘されていたところであり、この欠陥を是正することが強大な競争者に伍して落伍者とならないために必要である」との認識に立ち、しかも学校当局の力や露語部教員の努力に頼ることが不可能である以上、今こそ露西亜会がその本来の目的に従い、母校の進展に寄与すべき時であると力説した（『会報』第二八号、一九三九年六月十七日総会記事参照）。

総会の決議により、会則第二条は「本会は会員相互の助力、親睦を図り、母校露語部の進展に寄与し、露西亜に関

する各種事項を研究するを以て目的とす」と改められ、更に会の事業として「課外講演の開催」という一項が加えられた。会の機構も、会長自らの発意によって、会長の個人的指導体制を改め、会長、幹事を廃し、教員及び卒業生から選ばれる二〇名以内の理事より成る理事会の合議によって会を運営することとなり、八杉会長が理事長に推された。在校生からは、常務理事の業務遂行を助けるための委員六名が選ばれた。

課外講座実施のためには新たに講座委員会が設けられ、それぞれの分野の専門家たる卒業生を招いて、一九三九（昭和十四）年は十月から十一月まで五回、翌四〇年は四月から六月まで一〇回の講義が行われた。講義の内容はソ連の国家機構、ソ連共産党、ソ連の外交、軍事、経済、民族問題、ソ連をめぐる国際政局等、広汎な領域にわたるものであった。課外講座に要する資金充実のためには会員有志から寄付金を募集し、五〇余名の応募者から九〇〇円近い資金が寄せられた。

しかし一九四〇（昭和十五）年末、露語部及び露西亜会にとって大きな不幸が訪れた。すでに述べたように除村吉太郎教授がその思想的立場を理由に十一月三十日付で強制退職させられるのである。また「教育界の新情勢はわが露西亜会をして改組を余儀ならしめ、その会員中より在校生を分離し、卒業生のみを以て会員とするに至った」のであった（『会報』第三二号参照）。これに伴って一九四〇年十一月九日の総会で会則は大幅に改正され、「母校露語部の進展に寄与し」の文言は削除され、課外講演は中止となり、会の役員も幹事を一二名とし、その互選によって幹事長が置かれることになった。幹事長には八杉理事長が選ばれた。従来年二回発行されて来た会報も中止となり、同年七月発行の第三〇号をもって最終号とするに決した。

しかし、それから二年を経て、せめて会の存在を明らかにするためにも、会報はやはり少なくとも年に一回は発行する必要があるとの声が高まり、一九四二（昭和十七）年十二月、第三一号が「松田先生記念号」として発行された。

松田衛教授は同年五月三十日、還暦を機に、翌年三月末の停年を待たずに退官し、その功勞感謝会は十一月十七日に開かれたのであった。

思えば、東京外語露西亜会がその結成の当初から、一九四〇（昭和十五）年末、在校生を会員から排除するまでの一五年間、母校露語部の教育の充実、在校生の指導、露語部の進展に寄与した大きな功績は露語部の歴史を語る上で無視することのできないものであり、その活動の記録である会報は貴重な歴史的資料である。

会報は四六版の冊子で、初号が一九二六（大正十五）年七月に第三号として出され、翌年から一九三九（昭和十四）年まで一三年間は毎年二冊、一九四〇年に一冊、そして二か年の中断の後、一九四二年十二月に最後の第三一号が出た。通計二九冊、その総ページは一、四四三ページである。

会報には毎年一回、現任教員、卒業生及び在校生の名簿が付けられており（その総ページ数は会報総ページ数の三五パーセント）、会員の住所、その職業、または勤務先及び地位の異動を年毎に明確にたどることができる。

（注 この会報は一冊の欠本もなく八杉会長が大切に保存し、一九四五「昭和二十」年五月の大空襲で麻布の自宅が焼失した際も、幸い疎開して焼失を免れ、戦後会長から外語へ寄贈されたものである。

尚、終戦後逸早く再発足した「東京外語ロシア会」が一九四八年十二月に発行した会員名簿の冒頭の「再発足までの経過」の記述によれば、一九四四年の春に会報第三二号が発行されたことになっているが、現在その会報は見つかっていない。）

会報には毎号巻頭に八杉会長の会務報告、会の活動についての希望あるいは所見、新入生に対するロシア語学習についての説示などが載っており、それによって露西亜会に寄せる会長の熱い思いを窺い知ることができる。

会報にはまた例会及び総会で行われたソ連邦事情についての講演や報告の要旨、会員あるいは部外の専門家から寄せられた研究論文、旅行記や回想記など、実に六〇余篇が収録されている。

例えば山内恭治（明治四十一年卒、三菱商事）は「赤露に於ける社会制度の一端をのぞきて」（『会報』第三号）で、

一〇か月のロシア滞在中に見学した託児所、小学校、病院、刑務所について極めて好意的な印象を語っている。

除村吉太郎（大正七年卒）の「シチェブキンとロシア劇場のリアリズム」〔会報〕第三号）、磯村英一（大正十二年卒、のちに東洋大学学長）の「労働者教育運動の発達」〔会報〕第三号）、蔵原惟人（大正十二年卒）の「ソヴェート連邦の経済復興と電化事業」〔会報〕第四号）はいずれも寄稿論文である。訪日していた文学者シヴイリヨフは講演「ソヴェート・ロシアに於ける文学」〔会報〕第五号）で、一九二〇年代の後期、党の抑圧のもとで尚活発な創作活動を続けるソシチェンコ、ブルガーコフ、ピリニャークらの作品について詳しく語った。レニングラード大学東方言語研究所の教授コンラドは「最近露西亜語の変化」について語り〔会報〕第五号）、革命後の変化の特徴としてプロレタリア化（卑俗化）、ヴァーヴァリズム（外来語の多用）、アメリカ化（略語化）の三点を挙げ、それがロシア語の美しさを破壊していることを嘆いている。

米川正夫（明治四十五年卒）は「ソヴェートの演劇と文学」〔会報〕第六号）で訪ソの印象を語り、二つの対照的な劇場、メイエルホリド劇場と芸術座の新旧二つの傾向について述べている。

通商代表部法律顧問ベックマンの「ソヴェート連邦の経済的並に文化的建設事業に於ける五年計画」〔会報〕第八号）は工業、交通、貿易、教育、異民族の文字改革、文学等、百般にわたる二時間を超える長い講演であった。

〔会報〕第一四号には一九三二（昭和七）年五月の総会における米川正夫のソ連作家「ピリニャークの文学について」の講演、ソヴェート文学についての参会者の多様な質問に対するピリニャークの応答、部外から特に招かれた大竹博吉の「ソヴェート・ロシアの現状」が載っている。

駐在武官として三年間ソ連に在勤した前田稔（大正十年選科修了、当時海軍大佐、のち中将）の「ソ連邦在勤中の見聞」〔会報〕第一九号）は五カ年計画による重工業の目覚ましい発展や軍備の拡充、その半面依然として改善され

ない食糧難、物資難、住宅難について、自らの見聞にもとづいて詳しく報じている。

二九冊の会報に載った六〇余点にのぼるこれらの講演や報告の資料は、ソ連邦及び日ソ関係の歴史研究の上で今もなおその価値を失っていない。

戦後のロシヤ会

東京外語露西亜会は戦後一九四七（昭和二十二）年五月にはじめての総会をひらき、会則を改正して再び在校生を会員に加えることとし、「露西亜」の文字を廃し、「東京外語ロシヤ会」として新発足し、四八年十二月には戦後最初の会員名簿を発行した。

当時占領軍CIE顧問イールズの「赤色教授追放」キャンペーンは凄まじいものがあり、これに対し学生は全国的に激しい抵抗運動を展開していた。このような状況のもとでロシヤ会が一部幹事の専行により、一九五一（昭和二十六）年十二月の総会に講演者として殊更に反共理論家鍋山貞親を招いたため、総会は学生によって完全にボイコットされた。これが原因となって、一九五三年十一月の総会で会員から学生を排除することが強引に決議され、八杉会長をして「曾って本会が校の内外を打って一団とし、卒業者各位の助力によって在校後進者の誘掖指導に努めました時を思いますれば多少の感慨無きを得ぬわけではありませんが……本会も創立来五十年……地上何物にも無限の生命を望むことは出来ませぬが……」、「（ロシヤ会会報）第二号、一九五四年」と概嘆させた。誠に露西亜会は八杉会長が全生涯を捧げて慈しみ育て、愛し、守って来た会であった。

戦後の会報は一九五一（昭和二十六）年の第一号から一九八三（昭和五十八）年の第二九号まで、もっぱら露語部教官の手によって発行された。会報はタブロイド版で、量的には旧露西亜会会報には及ぶべくもないが、編集者はつ

ねに、内容において戦前の会報に劣らず、貴重な歴史的資料たらしめることを念願し、また学内露語部の情況やその行事あるいは毎年の語劇について詳細に報じ、卒業生と在校生との結びつきの保持強化に努めた。

第三次の「東京外語ロシヤ会」が再び在学生を会員に加えて新しく発足したのは一九九七（平成九）年十一月二十二日の総会においてである。

戦時下の露語部

話を元に戻し、前章では大正から昭和初年の外語露語部の自由な雰囲気について述べてきたが、満州事変にはじまる戦後体制下の露語部の状態はどうだったか。これについては一九四〇（昭和十五）年から二年間の中断を経て出された『露西亜会々報』第三一号（これは還暦を機に外語を退官した松田衛記念号となっており、戦前に出された最後の会報である）で、主任教授となった佐藤勇の「母校の近状」が、詳しく伝えている。

「この数年間に、校舎こそ旧態依然たる震災後のバラックながら、内容的に面目を一新した観があります。過去の自由主義個人主義的であった時代から、師弟相携えて俱学俱進の報告団精神の昂揚へと一大飛躍を遂げつつあります」と前置きして、その具体例として集団勤労作業のため、体力のない教官が停年前に辞職していつていること、教員も学校報国隊の一員として、教練査察が義務づけられ、大隊長、中隊長の資格で学生の列に加わり、軍人式の挙手の礼をしていること、また軍事教練の強化の結果、生徒の礼儀作法が十年前のマルクス主義流行時代より格段に良くなったことがあげられている。

また一九四一（昭和十六）年からはじまった卒業短縮（この年は十二月卒業）により、四二年には半年短縮して九月卒業となるが、学力の低下のないよう夏期休暇（夏期体練期と改名）を返上して、授業が行われた。なおこれは今

からすると笑い話に思われようが、この年の統計で外語生徒の平均体位が国立学校中ビリから二番目だったことが判明、学校当局は四五分授業に切り換え、十二時半までに五時限分の授業とし、午後は体力錬成に当てることになったという。

また入学志願者は、時局を反映して英語部の志願者が減少の傾向をたどり、逆に支那語と露西亜語は需要が増加したため、従来の二倍を採用、文・法・拓の三科の混合組と貿易科だけの単一組の二科に分けて授業が行われるようになる。

そしてこの一九四一、四二年は、露語部にとって、教授陣の大幅な交替が行われた年でもある。なんと二年間で、露語部は六名の新任教官を採用するのである。つぎにその名を列挙する。

アレクサンドル・バプロウイチ・ミチューリン（トムスク大学法科卒）がトドロウイチの後任として一九四〇年就任し、木村彰一（東大文科昭和十二年卒）が一九四一年十月教授任命。すぐれた言語学者でもあつた木村は、四七年北海道大学に移籍、ロシア文学科を設置し、スラブ研究センターの前身であるスラブ研究施設の創設に参加、その後東京大学に移り、そこにも露文科を設置した。一九五三年には「ロシア文法」（八杉貞利と共著、岩波書店）、一九八五年には「古代教会スラブ語入門」（白水社）を出している。一九八六年、ラテン語の辞書編纂作業中に倒れ、不帰の人となった。石山正三（昭和十五年卒）は四一年陸軍航空士官学校士教官より母校助教教授に就任し、ベ・ア・ストルジェシエフスキー（ハルビン政法大学東亜経済科卒）が一九四一年十一月就任、山本二郎（昭和九年卒）が四二年四月陸軍幼年学校より母校教授に就任。山本はその後久保二郎と改姓。四七年より神戸市外国語大学に転任した。さらに野島義一（昭和十二年卒）が四二年五月東亜研究所より母校助教教授就任、東亜研究所嘱託を兼務している。ストルジェシエフスキーは東亜研究所でラジオ傍受をしていたポーランド人で、学生増募に伴って雇い入れられた。

またミチューリンは米秋林と漢字の当て字を使い、国籍欄には元露国人と便覧には記載されている。なお、ミチューリンは戦後一九四六年いち早くソ連国籍を取得した。

そしてこの戦前の露西亜会報最終号には、会の活動が許されぬ情勢にあり、例会もなく、在校生のために催した「ソ連事情講演会」も中止のやむなきに至ったという八杉貞利の苦渋に満ちたあとがきが付されている。

九 東京外事専門学校から東京外国語大学へ

一九四四（昭和十九）年に東京外事専門学校と校名が変更され、修業年限も三年に短縮され、本科は第一部（支那科、蒙古科、タイ科、マライ科、インド科、ビルマ科、フィリピン科、イスパニア科、ポルトガル科）と第二部（ドイツ科、フランス科、ロシア科、イタリヤ科、英米科）に分かれており、学則第一条には「本校ハ専門学校令ニ依リ皇国ノ道ニ則リテ海外諸民族ノ諸事情及（中略）其ノ人物ヲ錬成スルヲ以テ目的トス」と「八紘一字」の精神が高らかにうたわれていた。

一九四三年からは勤労働員などで三年時の授業は行われなかったが、これも学則第六条「授業ハ教授及修練トス。修練ニ付テハ別ニ之ヲ定ム」と明記されていたのだから、当時の状況からすればやむを得ぬ事態だったのだろう。

この当時学生生活を送った原卓也（昭和二十六年卒）によると、西ヶ原に新築した校舎は一九四五年五月に焼失、上野の東京美術学校や図書館講習所、美術研究所などに分散して授業をし、四六年九月から上石神井の東京電波兵器技術専修学校跡の木造棟と、智山中学の一部を借用して授業が再開された。木造棟はおそろべき代物で、窓にはガラスでなく障子紙が貼ってあり、狭い中庭をへだてた向いの棟には引揚げ者の家族のおむつや洗濯物がひるがえってい